

国立国語研究所学術情報リポジトリ

南琉球宮古語与那覇方言の名詞アクセント体系： 初期報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 五十嵐, 陽介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002462

南琉球宮古語与那覇方言の名詞アクセント体系：初期報告

五十嵐 陽介

1 はじめに

琉球諸語は5つの下位言語、すなわち奄美語、沖縄語（以上、北琉球グループ）および宮古語、八重山語、与那国語（以上、南琉球グループ）から構成される（Pellard 2009, 2011; Shimoji 2010）。本論文が分析対象とする与那覇方言は、南琉球グループに属する宮古語の方言のひとつであり、沖縄県宮古島市下地字与那覇で話されている。

本論文は、母語話者1名を対象に行った1時間のアクセント調査で得られたデータを分析することによって、与那覇方言の名詞アクセント体系を、特にアクセント型の表層の実現形と所属語彙に焦点を当てて、記述することを目的とする。

2 先行研究の記述

2. 1 概略

与那覇方言のアクセント体系に関する記述は平山他（1967）に見つけることができる。平山輝男らは、「アクセントも一般に平板調であって、一型アクセントのように誤って観察するおそれがあるが、事実は低平型と高平型との対立がある」（平山他 1967: 27）と述べているが、この記述は、第1に与那覇方言は二型アクセント体系（上野 1984 参照）を有することを、第2にこの方言の発話には著しいピッチ変化が観察されないことを示している。

平山輝男らによると、与那覇方言のアクセント体系は二型であるが、青少年層ではアクセント型の区別が不明瞭になる現象（いわゆる「曖昧アクセント化」）が観察されるという。特に、動詞・形容詞のアクセントの対立は部分的に合流するか、完全に合流しているという。平山輝男らが調査を行った1960年代の「青少年」は、仮に「青少年層」を10歳から25歳と定義するならば、筆者らが調査を行った2011年には、60歳前半から70歳後半になっているはずである。後述するように本論文の分析は75歳の話者の発話に基づいている。したがって、もし平山輝男らの記述が正しければ、本論文が分析対象とした与那覇方言のアクセント型の区別は不明瞭になっている可能性がある。

2. 2 所属語彙

平山他（1967）に従えば、与那覇方言では、類別語彙（金田一 1974 参照）の2モーラ名詞は、第1類から第3類が一方のアクセント型に所属し、第4類と第5類が他方の型に所属する（II-1·2·3/4·5）。一方3モーラ名詞は、第1類から第4類の大部分と5類の一部が一方の型に所属し、第5類の大部分と第6類から第7類のほとんどが他方の型に属する（III-1·2·3·4·(5)/5·6·7）。しかしながら、琉球諸語におけるアクセント型の所属語彙は、類別語彙の合流のみでは説明で

きないことが、すでに十分に論じられている（服部 1958, 1979; 松森 1998, 2000a, 2000b, 2008, 2010, 2011）。琉球諸語のアクセント型の所属語彙を論じるためには、松森晶子の提案する「系列」「系列別語彙」という概念を導入するのが有効である。

「系列」とは、現代の琉球語諸方言の比較から再建される琉球祖語のアクセント型によって区別される語類のことである（松森 2000b）。松森晶子は、琉球祖語には 1 モーラ語に少なくとも 2 種類、2 モーラ以上の語には少なくとも 3 種類のアクセント型による区別があると仮定し、それぞれのアクセント型で区別される語類を A 系列、B 系列、C 系列と呼ぶ。また、それぞれの語類に所属する語の総体を「系列別語彙」と呼ぶ。各系列名に冠せられたアルファベット A, B, C の順序は、系列別語彙と類別語彙との対応に基づいて決められている。具体的には、類別語彙 2 モーラ名詞の第 1 類と第 2 類の語彙のほとんどが所属する語類を A 系列、第 3 類の大部分および第 4 類・第 5 類の一部が所属する語彙を B 系列、第 3 類の少数および第 4 類・第 5 類の一部が所属する語彙を C 系列と定めている。

系列別語彙を導入した上で与那覇方言におけるアクセント型の所属語彙に関する平山輝男らの記述を再検討すると、松森（2011）が指摘しているように、A 系列と B 系列が合流し一方の型に所属し、C 系列が他方の型に所属している（A·B/C）と言うことができるようになる。

以降本論文では、与那覇方言において A 系列と B 系列の語彙の大部分が所属するアクセント型を AB 型、C 系列の語彙の大部分が所属するアクセント型を C 型と呼ぶことにする。また本論文は、三型アクセント体系を有する琉球語諸方言のアクセント型について言及することがあるが、その際、A 系列、B 系列、C 系列の語彙の大部分がそれぞれ所属するアクセント型を、それぞれ A 型、B 型、C 型と呼ぶことにする。

2. 3 表層の実現形

平山他（1967）によれば与那覇方言のアクセント型の表層の実現形は表 1 の通りである。以後慣習にしたがって、ピッチの上がり目を [で、下がり目を] で表す。平山輝男らは一方の型を「低平型」、他方の型を「高平型」と呼んでいるが、その実現形と所属語彙から判断して、前者は本論文の AB 型に、後者は本論文の C 型に相当する。平山輝男らは、2 モーラ名詞については、単独発話だけでなく、助詞 *nudu*「が」（主格+焦点標識）と述語が後続する場合の実現形も報告しているが、3 モーラ名詞については単独発話における実現形しか報告していない。

表 1：平山他（1967）による各アクセント型の実現形の記述。表記は平山他（1967）に従う。

モーラ数	アクセント型	単独発話	助詞 <i>nudu</i> 「が」（主格+焦点標識）の付いた発話
2 モーラ	高平型（AB 型）	<i>jama</i> 「山」	<i>jama nudu</i> [?ai. 「山がある。」
	低平型（C 型）	[<i>usi</i> 「臼」]	[<i>usi nudu</i> ?ai. 「臼がある。」]
3 モーラ	高平型（AB 型）	<i>fukuru</i> 「袋」	
	低平型（C 型）	[<i>fusui</i> 「薬」]	

表1から明らかなように、AB型は語全体が低く実現されるのに対して、C型は語全体が高く実現される。2モーラ名詞に助詞 *nudu* が後続した場合、助詞の高さは先行する名詞の高さをそのまま引き継ぐ。すなわちAB型では低く、C型では高く実現される。

3 分析

3. 1 方法

3. 1. 1 調査日・場所

データ収集は2011年9月7日沖縄県宮古島市下地にておこなった。

3. 1. 2 被験者

被験者は1936年生まれの男性（調査当時76歳）1名であった。与那覇以外の居住歴はない。また両親、配偶者ともに与那覇出身である。

3. 1. 3 調査語

調査語リストは、与那覇方言と同じく宮古語の方言である多良間方言（松森2010）および池間方言（五十嵐他2012）の同源語の語形を参考にして、2モーラ名詞と3モーラ名詞がほぼ同数含まれるように作成した。語彙の選定は、系列別語彙と類別語彙との対応を検討することを念頭においておこなった。

系列別語彙の各系列がどのような語によって構成されているかに関する定説はない。そこで、調査語リストの語彙の選定の際には、系列別語彙の代用として、多良間方言のデータ（松森2010）を用いた。この方言は、三型アクセント体系を有しかつ他の琉球諸語とアクセント型における規則的な対応を示す方言のひとつである。調査語リストには、多良間方言における3種類のアクセント型（A型、B型、C型）にそれぞれ属する語彙がほぼ同数含まれるようにした。

類別語彙については、上野善道作成の私家版『アクセント調査語彙(B)』（収録語彙は上野（1985）参照）を使用し、各類別の語が調査語リストに少なくともひとつ含まれるように語彙を選別した。

調査語リストには71語が記載されていたが、実際に現地で収集され、かつ分析の結果アクセント型が特定できた語は表3-4に示す66語（2モーラ名詞36語、3モーラ名詞25語、4モーラ名詞5語）であった。以後、与那覇方言の語の表記には簡略音声表記を用いる。[i]は舌尖母音を表す。長母音は母音字を重ねることで表記する。

調査では、調査語の単独発話に加えて、表2に示すキャリア文に調査語を挿入した発話を録音した。キャリア文は、調査語に助詞 *nudu*「が」（主格+焦点標識）を付与し、かつ述語を後続させたものと、調査語に助詞 *mee*「も」（並列）を付与し、かつ述語を後続させたものであった¹。述語は表2に示したとおり様々であった。

¹ このほかに、指示詞 *kunu*「この」を調査語の前に置き、調査語に助詞 *ja*「は」（主題標識）を調

表2 キャリア文. X は調査語を示す.

単独発話	X.	「X。」
調査語 + 助詞 nudu + 述語	X nudu n ^j aaŋ/ uraŋ.	「X がない/ いない。」
	X nudu aa/ uu.	「X がある/ いる。」
調査語 + 助詞 mee + 述語	X mee n ^j aaŋ/ uraŋ.	「X もない/ いない。」
	X mee aa.	「X もある。」
	X mee aa dussŋ.	「X もある。」
	X mee aŋii duu.	「X もある。」

3. 1. 4 分析手順

分析は、収集した発話の聴覚印象および発話から抽出した基本周波数（F0）曲線の視認に基づいておこなった。今回の分析は予備的な性格を持つものであること、およびデータが質・量ともに限定されていることから、定量分析はおこなわなかった。F0 曲線の分析は Praat (Boersma and Weenink 2011) を用いておこなった。

3. 2 結果

3. 2. 1 概要

先行研究の記述の妥当性をおおむね確認した。与那覇方言のピッチの変化幅は概して小さいようで、際立った高低変化がない印象を与える。このことは、「アクセントも一般に平板調」とする平山他（1967）の記述と一致すると思われる。また、この方言におけるアクセント型には少なくとも 2 種類の区別があり、平山他（1967）の記述と一致する。3 種類以上の区別があることを示す決定的な証拠は見つけられなかった（ただし 3.2.4 参照）。所属語彙に関しては、概して A 系列と B 系列が合流し一方のアクセント型に所属し、C 系列が他方の型に所属しており（A·B/C）、先行研究の記述（松森 2011）と一致する。

一方で、先行研究の記述とは異なる事実も見つかった。平山他（1967）は、被験者の世代ではアクセント型の区別が不明瞭になる現象（曖昧アクセント化）が進んでいると述べているが、本分析の結果は、アクセント型の区別が明瞭に保たれていることを示した。また、分析の結果明らかになったアクセント型の表層の実現形は、表 1 に示した平山他（1967）の記述とは、必ずしも一致しなかった。

調査語の後に置いたキャリア文も用いたが、このキャリア文で発話された調査語の数が少なかったため、分析対象から除外した。

3. 2. 2 所属語彙

分析の結果明らかになった調査語のアクセント型を表 3-4 に示す。類別語彙に対応語（同源語）がある場合に限り、与那覇方言の語形の左に類別を記す。

表から明らかなように、多良間方言で A 型の語彙は、1 語 (*munuŋ* 「言葉」) を除いてすべてが与那覇方言の AB 型に対応している。同様に、多良間方言で B 型の語彙も 1 語 (*pusŋ* 「星」) を除いてすべてが与那覇方言の AB 型に対応しており、多良間方言で C 型の語彙のすべてが与那覇方言の C 型に対応している。この結果は、与那覇方言において A 系列と B 系列が合流した (A·B/C) とする松森 (2011) の見解を支持する。

表 3 与那覇方言のアクセント型と多良間方言のアクセント型の対応（前半）.

		与那覇方言におけるアクセント型		
		AB 型		C 型
多良間方言におけるアクセント型	A 型	1 拍 1 類	<i>puu</i>	帆
		1 拍 2 類	<i>naa</i>	名
		2 拍 1 類	<i>ika/ ik^ja</i>	鳥賊
		2 拍 1 類	<i>usŋ</i>	牛
		2 拍 1 類	<i>zzu</i>	魚
		2 拍 1 類	<i>f^jtsŋ</i>	口
		2 拍 1 類	<i>k^jusŋ</i>	腰
		2 拍 1 類	<i>juda</i>	枝
		2 拍 1 類	<i>musŋ</i>	虫
		2 拍 2 類	<i>kabŋ</i>	紙
		2 拍 2 類	<i>p^jtu</i>	人
		2 拍 2 類	<i>isŋ</i>	石
		2 拍 2 類	<i>kaa</i>	井戸
		2 拍 x 類	<i>kami</i>	亀
		2 拍 x 類	<i>tuŋ</i>	鳥
		3 拍 1 類	<i>butu</i>	夫
		3 拍 1 類	<i>kataa</i>	形
		3 拍 1 類	<i>buduŋ</i>	踊り
		3 拍 1 類	<i>judal</i>	涎
		3 拍 1 類	<i>panatsŋ</i>	鼻血
		3 拍 4 類	<i>kagam</i>	鏡
		3 拍 4 類	<i>f^jkuru</i>	袋
		3 拍 4 類	<i>kujum</i>	暦
		-	<i>ffa</i>	子供
		-	<i>tuzŋ</i>	妻
		-	<i>bikidumu</i>	男/夫

表4 与那覇方言のアクセント型と多良間方言のアクセント型の対応（後半）.

与那覇方言におけるアクセント型		
	AB型	C型
B型	1拍3類 ti ⁱ 手	2拍1類 pu ^s 星
	2拍3類 mm 苺	
	2拍3類 pana 花	
	2拍4類 jadu 戸	
	2拍4類 dzin ^g お金	
	2拍5類 ami 雨	
	3拍1類 kuruma 車	
	3拍4類 uza 鶴	
	3拍5類 maffa 枕	
	3拍5類 avva 油	
	- jjki 鱗	
	- kaina 腕	
	- kamats ^g 類	
	- midumu 女	
	- sajafu 大工	
C型		2拍3類 puni 骨
		2拍3類 uja 祖父
		2拍3類 maa ^g 鞠
		2拍4類 us ^g 曰
		2拍4類 im 海
		2拍4類 funi 舟
		2拍5類 madu 暇
		2拍5類 nabi 鍋
		3拍4類 oog ^g 扇
		3拍4類 p ^g asam 鋏
		3拍5類 pook ^g 篓
		3拍6類 ssam 虱
		3拍7類 fusu ^g 薬
		- sata 砂糖
		- tida 太陽
		- waa 豚
		- aagu 歌
		- gazam 蚊
		- mmaga 孫
		- jarabi 子
		- miipana 顔
		- nuzzuu 糸
		- ciibuni 背骨

多良間方言におけるアクセント型

以下、系列別語彙あるいは類別語彙との対応が不規則である語について簡潔に述べる。その際多良間方言との対応だけでなく、奄美語沖永良部方言（松森 2000b）、沖縄語金武方言（松森 2008）との対応も検討する。これらの方言は多良間方言と同様に三型アクセント体系を有する。

püsɻ 「星」は類別語彙の 2 拍 1 類であるため、類別語彙と琉球諸語のアクセント型の対応に関するこれまでの研究の知見（服部 1958, 1979; 松森 1998 et seq.）に基づけば A 系列であることが期待されるが、宮古語多良間方言では B 型、与那覇方言では C 型であり、対応が不規則である。一方、沖縄語金武方言（松森 2008）では A 型であり、規則的な対応がある。

fukuru 「袋」は類別語彙の 3 拍 4 類であるため、B 系列あるいは C 系列であることが期待されるが、宮古語多良間方言では A 型であり、対応が不規則である。一方、与那覇方言では B 型であるため、規則的な対応があるようと思われる。ただしこの語は沖縄語金武方言では C 型であり、いずれにせよ方言間の対応は不規則である。

同様に、*pasam* 「鉄」は類別語彙の 3 拍 4 類であるため、B 系列あるいは C 系列であることが期待される。この語は宮古語多良間方言でも与那覇方言でも C 型であるが、沖縄語金武方言では B 型であり、方言間の対応が不規則である。

また、*kagam* 「鏡」と *kujum* 「暦」も 3 拍 4 類であるため、B 系列あるいは C 系列であることが期待される。これらの語は沖縄語金武方言では B 型であり、規則的な対応があるようと思われるが、宮古語多良間方言では A 型であり対応が不規則である。一方、与那覇方言では AB 型であるため、対応が規則的であるかどうか判断できない。

最後に *munuɻ* 「言葉」であるが、この語は類別語彙に同源語が存在しないが、宮古語多良間方言で B 型、奄美語沖永良部方言で B 型である。しかし与那覇方言では C 型であり対応が不規則である。

3. 2. 3 「名詞+nudu+述語」における実現形

まず、名詞に助詞 *nudu* が後続し、さらに述語が後続する場合の実現形を検討しよう。2 モーラ名詞の実現形の一例を図 1 に示す。図の上段は音声波形であり、中段は F0 曲線、下段はモーラと語の転記である。音声波形と F0 曲線上の縦線はモーラ境界を表す。

AB 型では、助詞 *nudu* の第 2 モーラで F0 が高くなり、それ以前は低い F0 が続く。一方 C 型では、名詞の第 2 モーラから F0 が高くなり、その高さは助詞 *nudu* の終端まで継続する。C 型名詞の第 1 モーラの高さは安定しないようである。このモーラの高さは、第 2 モーラと同水準の（すなわち高い）ように知覚されることもある一方で、第 2 モーラより低く知覚されることもある。後述の「語頭の急下降」と関係しているのかもしれない。

平山他（1967）には 2 モーラ名詞に助詞 *nudu* が後続した場合の実現形に関する記述（表 1）がある。本分析結果と比較してみよう。平山輝男らの記述は、AB 型では助詞 *nudu* も含めすべてのモーラが低く実現されるとしている点で、本分析結果と異なる。この差が世代差や個人差に起因するものか、あるいはその他の要因によるものかは不明である。一方、C 型については、平山輝男らは助詞 *nudu* も含めすべてのモーラが高く実現されると記述しており、本分析結果

とほぼ一致する（ただし、第1モーラが第2モーラとほぼ同水準のF0を有する場合の実現形に限られる）。

図1（左）から明らかなように、2モーラAB型には、語頭に短時間で急激に下降するF0が観察される。（2モーラC型にも観察されるかは不明である）。当該の下降が語頭（韻律的な語の冒頭）に生じる特徴なのか、それとも階層的により上位の韻律的単位の冒頭に生じる特徴なのかは現時点では不明である。以後、この下降を「語頭急下降」と呼ぶ。

この語頭急下降は知覚可能であるが、少なくとも2モーラ・3モーラ名詞においては、例えば東京方言における頭高型の名詞が与えるような聴覚印象を与えることはない。この語頭急下降は、語中で声の高さが凹曲線（concave curve）を描くような聴覚印象を与える。また、この語頭急下降は、少なくとも2モーラ・3モーラ名詞に関する限り、あるトークンでは顕著に知覚されるが、別のトークンではほとんど知覚されない。語頭の急下降が言語学的に重要な特徴であるかどうかは現時点では不明である。この問題は4モーラ名詞を検討する際に再び論じることとする。

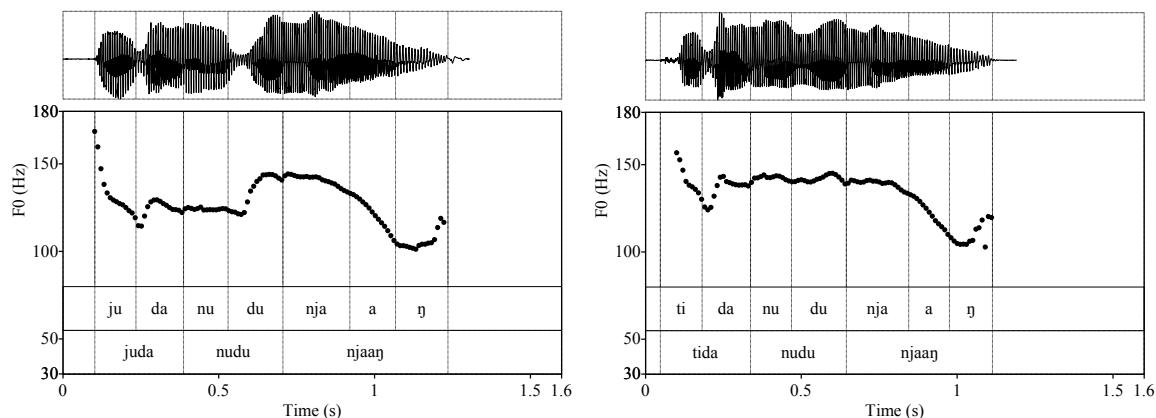


図1 2モーラ名詞+nudu+述語。AB型 juda 「枝」（左）、C型 tida 「太陽」（右）。

3モーラ名詞の実現形の一例を図2に示す。AB型では、助詞nuduの第2モーラでF0が高くなる。これは2モーラAB型と同様である。また語頭急下降が観察される点も2モーラAB型の場合と同様である。

C型では、名詞の第3モーラからF0が高くなり、その高さは助詞nuduの終端まで継続する。名詞の第3モーラ以前は低いF0が続く。語頭には語頭急下降が観察される。

なお図1とは異なり図2では、助詞nuduから述語にかけてF0下降が観察されるが、これは名詞のアクセント型によるものではなく、述語（njaan vs. uraj）のアクセント型によるものである。

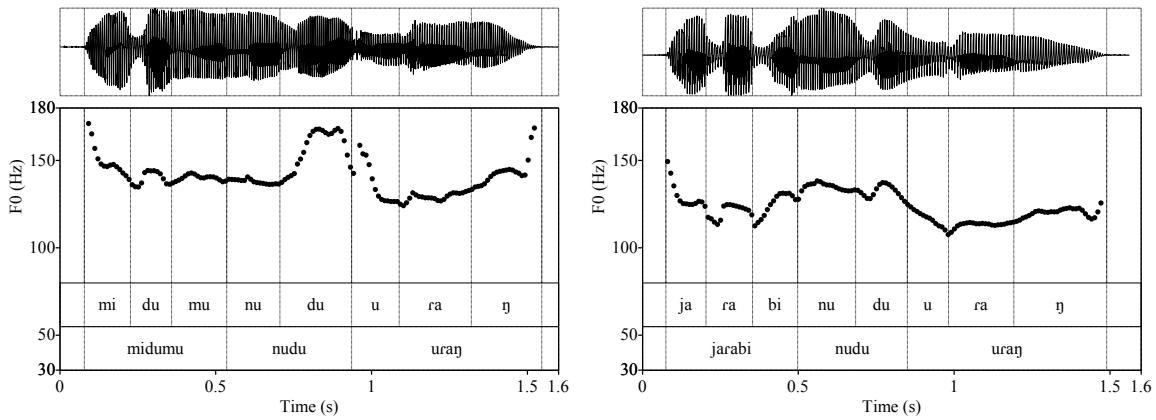


図2 3モーラ名詞+nudu+述語. AB型 midumu「女」(左)、C型 jarabi「子供」(右).

図3は4モーラ名詞の実現形の一例である。AB型では、2モーラ・3モーラAB型の場合と同様に、助詞nuduの最終モーラでF0が高くなる。一方C型では、3モーラC型の場合と同様に、名詞の第3モーラからF0が高くなり、その高さは助詞nuduの終端まで継続する。

AB型とC型の双方において、名詞の第1モーラから第2モーラにかけてのF0下降が観察される。この下降は、2モーラ名詞および3モーラ名詞に観察された語頭急下降とは、音響的にも聴覚印象の上でも異なる。2モーラ・3モーラ名詞では、F0下降は極めて短時間で終了するため、第1モーラの大半は低いF0値を持つ。それに対して4モーラ名詞では、高いF0値が第1モーラの大半を占め、F0下降は第1モーラ終端付近から第2モーラにかけて生じる。その結果、4モーラ名詞の語頭は東京方言の頭高型に似た聴覚印象を与える。すなわち第1モーラが高く、第2モーラが低いという印象である。4モーラ名詞に観察されるこの現象を「語頭卓立」と呼ぶことにする。これが語頭の特徴か階層的に上位の韻律単位の特徴かは不明である。

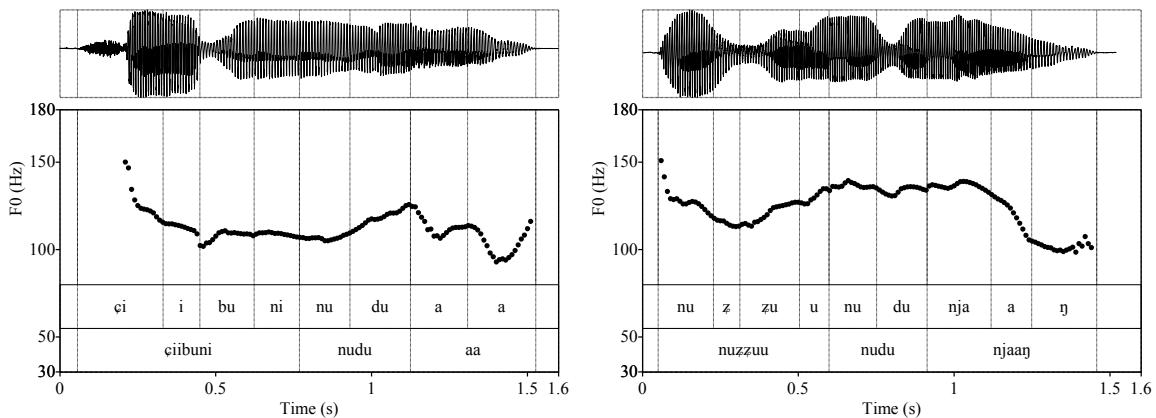


図3 4モーラ名詞+nudu+述語. AB型 ciibuni「背骨」(左)、C型 nuzzuu「糸」(右).

この語頭卓立に加えて、AB型では助詞nuduの第2モーラに、C型では名詞の第3モーラにF0の高まりが生じることで、「4モーラ名詞+助詞nudu+述語」という環境には、高く知覚さ

れるモーラが、低く知覚されるモーラを挟んで、2か所存在することになる。すなわち伝統的に「重起伏調」と呼ばれてきた実現形が観察されることとなる²。

この4モーラ語の語頭卓立と、2モーラ名詞・3モーラ名詞の語頭急下降とが関連する現象であるのかあるいは独立した現象であるのかは、将来検討すべき課題である³。

3. 2. 4 「名詞+mee+述語」における実現形

次に、名詞に助詞 *mee* が後続し、さらに述語が後続する場合の実現形を検討しよう。後に明らかになるように、この条件における実現形は、助詞 *nudu* が後続する条件における実現形とは異なっている。2条件の間に著しい差異が観察されることがあるため、この方言には隣接する要素にしたがってアクセント型が交替する現象が存在するとみなすこともできそうである⁴。

図4は2モーラ名詞の実現形の一例である。この条件下ではAB型とC型の違いが中和するようである。双方のアクセント型において、第1モーラのF0は低く、第2モーラでF0が高くなり、高いF0が助詞の終端まで継続する。また、語頭には語頭急下降が観察される。

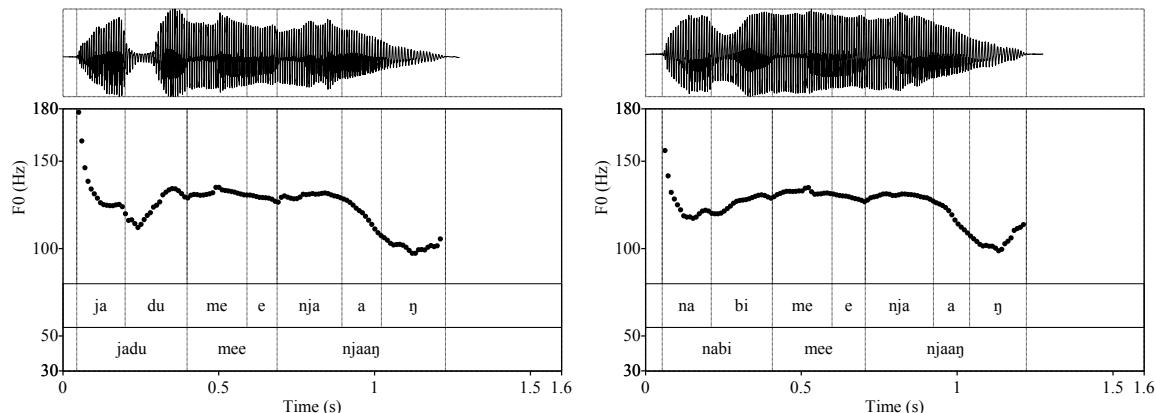


図4 2モーラ名詞+mee+述語. AB型 *jadu* 「戸」(左)、C型 *nabi* 「鍋」(右)。

図5は3モーラ名詞の実現形の一例である。AB型では、名詞の第3モーラでF0が高くなり、高いF0は助詞の終端まで継続する。語頭には語頭急下降が観察される。一方C型では、名詞全体が高いF0を伴って実現される。その後、名詞の終端から助詞の始端にかけてF0は下降し、助詞の第2モーラで高くなる。この条件でも語頭急下降が観察される。

² モーラ数の多い名詞に重起伏調が観察されるることは、調査前に松森晶子氏から教示を受けていた。

³ 筆者の主観的な観察では、与那覇方言と同様に、語頭が低く始まり、語中に上昇を伴うアクセント型を有する日本語方言の一部、例えば鹿児島方言や青森県五所川原方言にも、語頭急下降が生じることがある。これらの方言が話されている地域の近隣に、いわゆる重起伏調を有する方言が見つかるることは興味深い(例えば岩手県山田町方言(大西1989)や鹿児島県甑島方言(上村1941))。

⁴ このようなアクセント型の交替が観察されることとは、調査前に松森晶子氏から教示を受けていた。

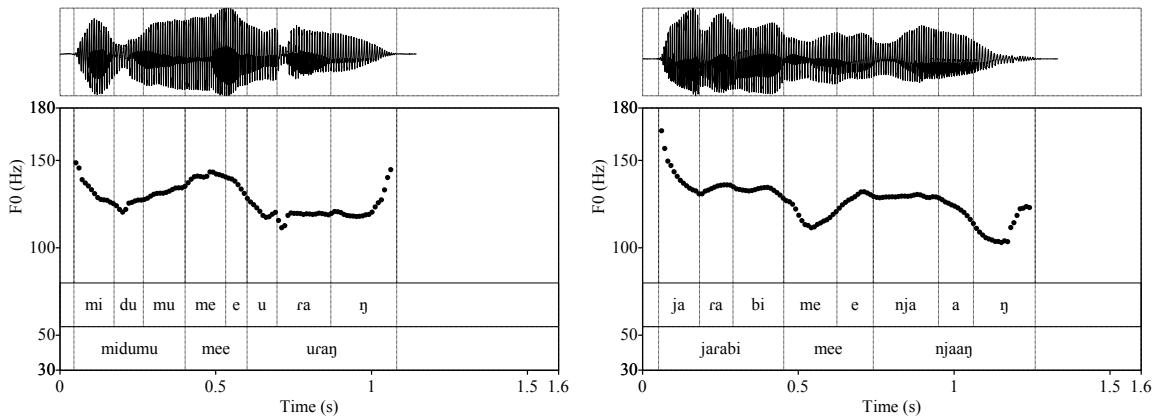


図 5 3 モーラ名詞+mee+述語. AB 型 midumu 「女」(左)、C 型 jarabi 「子供」(右).

図 6 は 4 モーラ名詞の実現形の一例である。AB 型では語頭卓立が観察される。すなわち第 1 モーラが高く、第 2 モーラが低い。その後第 3 モーラで F0 が高くなり、高い F0 は助詞の終端まで継続する。一方 C 型では、およそ名詞全体が高い F0 を伴って実現される。その後、名詞終端から助詞始端にかけての F0 下降が観察され、助詞の第 2 モーラで F0 が高くなる。

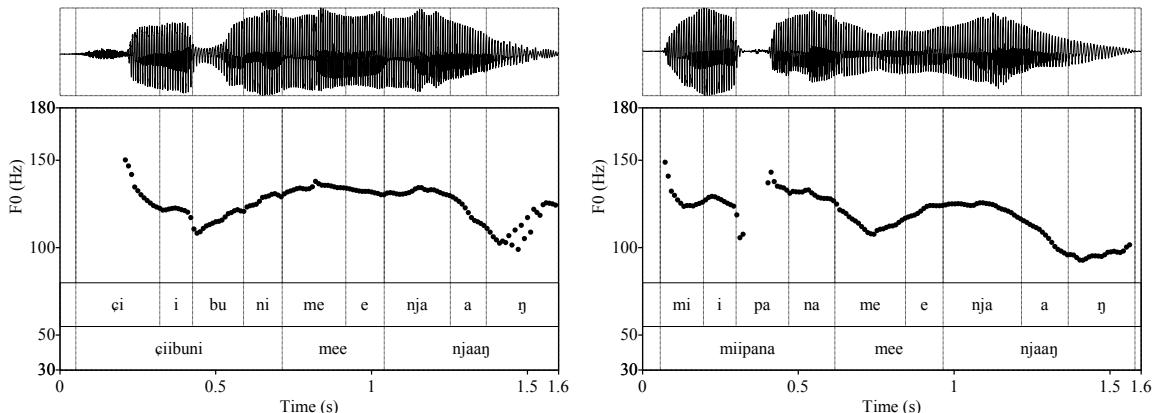


図 6 4 モーラ名詞+mee+述語. AB 型 ciibuni 「背骨」(左)、C 型 miipana 「顔」(右).

3. 2. 5 単独発話における実現形

最後に、名詞の単独発話における実現形を検討しよう。2 モーラ名詞が単独で発話された場合の実現形は、AB 型も C 型も「下降パタン」と「上昇パタン」の間でゆれる。ここで下降パタンとは第 1 モーラが高く、第 2 モーラが低い実現形のことであり、上昇パタンとは第 1 モーラが低く、第 2 モーラが高い実現形のことである。したがってこの条件下では AB 型と C 型を常に区別することはできない。しかしながら以下に述べるとおり、2 種類のパタンの生起確率には偏りが観察される。

C 型の語は上昇パタンで実現されることが多い。C 型の 2 モーラ名詞は 11 語であったが、このうち少なくとも一回下降パタンで発音された語は uja 「親」、waa 「豚」、pusl 「星」の 3

語のみであった。単独発話において、ある語が下降パタンで実現されたトークン数をその語の全トークン数で割った値に 100 を掛けた値を「下降パタン率」(%) と呼ぶとすると、C 型の語の平均下降パタン率は 21.2% (N = 11, SD = 40.2) であった。したがって C 型の単独発話の典型的な実現形は上昇パタンであるとみなしてよいであろう。

一方 AB 型の語は、下降パタンでの実現回数と上昇パタンでの実現回数の間に顕著な差は認められない。AB 型の 2 モーラ名詞は 25 語であったが、このうち 16 語が少なくとも 1 回下降パタンで実現された。平均下降パタン率は 50.3% (N = 25, SD = 44.9) であった。したがって AB 型の典型的な実現形が下降パタンなのか上昇パタンなのかを判断することは難しい。

図 7 はアクセント型で対立するミニマルペア (AB 型 usl 「牛」、C 型 usl 「臼」) の単独発話の一例である。少なくとも今回のデータでは、AB 型 usl 「牛」は必ず下降パタンで、C 型 usl 「臼」は必ず上昇パタンで実現された。AB 型の同じ語が下降パタンでも上昇パタンでも実現される事実は図 8 に示されている。ここでは、AB 型 ika 「イカ」が双方のパタンで実現されている。

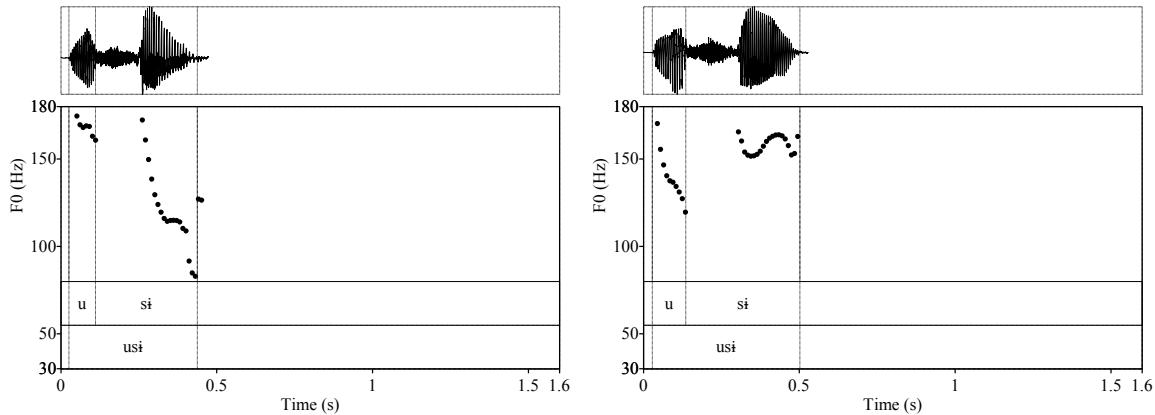


図 7 2 モーラ名詞単独発話の一例。AB 型 usl 「牛」(左)、C 型 usl 「臼」(右)。

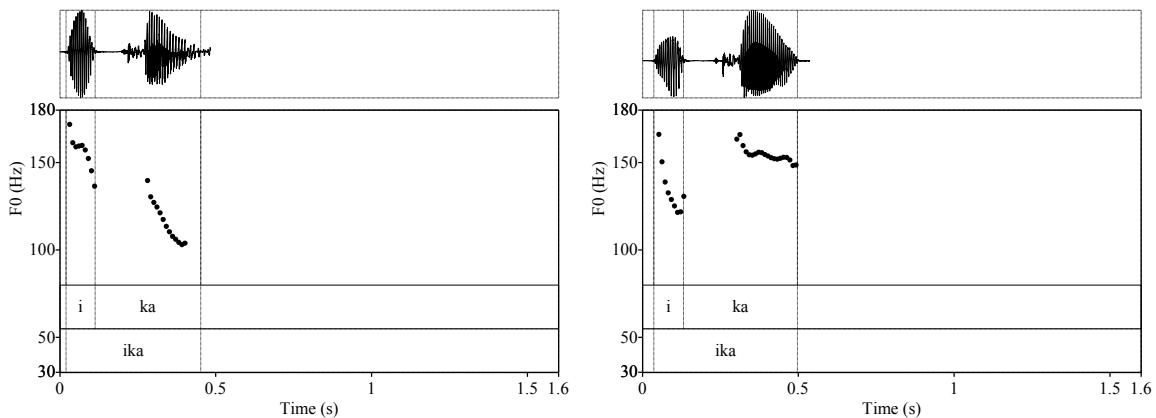


図 8 2 モーラ名詞 AB 型の単独発話におけるゆれ。AB 型 ika 「イカ」が下降パタンで実現された場合(左)と上昇パタンで実現された場合(右)。

平山他（1967）には2モーラ名詞の単独発話における実現形に関する記述（表1）があるので、本分析結果と比較してみよう。平山輝男らの記述は、AB型ではすべてのモーラが低く実現されるとしており、本分析結果とは一致しない。C型ではすべてのモーラが高く実現されるとしているが、これも本分析結果とは一致しない。この差が世代差や個人差に起因するものか、あるいはその他の要因によるものかは不明である。

今回のデータは質・量ともに限定されているため、偶然の可能性が極めて高いことを十分に認識したうえで、2モーラ名詞の単独発話におけるAB型の実現形のゆれに認められた以下の興味深い傾向を指摘しよう。

上昇パターンで実現された2モーラAB型の名詞に、系列の偏りが認められた。2モーラAB型の名詞のうちB系列と思われる7語が、1語を除いて必ず上昇パターンで実現された（*ami*「雨」、*mm*「芋」、*pana*「花」、*ti*「手」、*jadu*「戸」*dziŋ*「お金」、*uza*「鶴」のうち、最後の1語を除いたすべての語）。B系列の語の平均下降パターン率は14.2%（N=7, SD=37.8）であった。B系列の語の典型的な実現形が上昇パターンであることを示唆する結果である。一方、A系列と思われる18語のうち必ず上昇パターンで実現された語は3語にすぎなかつた（*butu*「夫」、*ffa*「子供」、*fucŋ*「口」、*ika*「イカ」、*isŋ*「石」、*kaa*「川」、*kami*「亀」、*musŋ*「虫」、*naa*「名前」、*p̊it̊u*「人」、*puu*「帆」、*tuŋ*「鳥」、*tuzŋ*「妻」、*usŋ*「牛」、*zzu*「魚」、*kabŋ*「紙」、*kusŋ*「腰」、*juda*「枝」のうち最後の3語のみ）。A系列の語の平均下降パターン率は64.4%（N=18, SD=40.0）であった。A系列の語の典型的な実現形が下降パターンであることを示唆する結果である。

もしこの結果が偶然でないであれば、与那覇方言の2モーラ名詞は、単独発話においてA系列とB·C系列がアクセント型によって区別されていることになる（A/B·C）。3.2.2から3.2.4で示したとおり、その他の環境において2モーラ名詞は、A·B系列とC系列がアクセント型によって区別されている（A·B/C）。このことはすなわち（今回の結果が偶然でないであれば）与那覇方言のアクセント体系は二型ではなく三型であることを意味する。今後のさらなる調査が必要である。

次に、3モーラ名詞の単独発話を検討しよう。図9は3モーラ名詞の単独発話の実現形の一例である。AB型では、第1・第2モーラのF0が低く、第3モーラでF0が高くなる。語頭には語頭急下降が観察される。一方C型では第1・第2モーラのF0が高く、第3モーラでF0が低くなる。語頭には語頭急下降が観察される。

3モーラ名詞の単独発話の実現形に関する記述を平山他（1967）に見つけることができる（表1）、本分析結果と比較してみよう。平山輝男らの記述は、AB型ではすべてのモーラが低く実現されるとしており、本分析結果とは一致しない。一方、C型ではすべてのモーラが高く実現されるとしているが、これも本分析結果とは一致しない。この差が世代差や個人差に起因するものか、あるいはその他の要因によるものかは不明である。

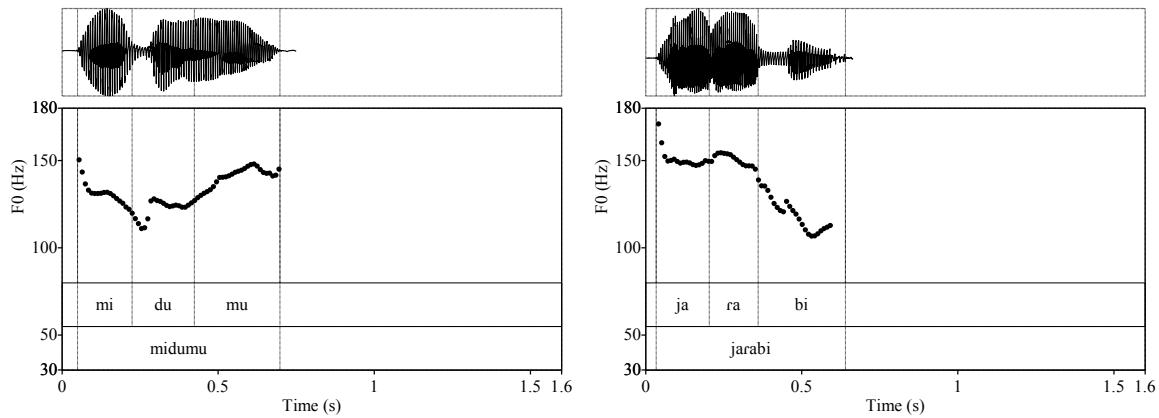


図9 3モーラ名詞単独発話. AB型 *midumu* 「女」(左)、C型 *jarabi* 「子供」(右).

4モーラ名詞の単独発話の検討に移ろう。図10は4モーラ名詞の単独発話の実現形の一例である。AB型では、第1～第3モーラのF0が低く、第4モーラでF0が高くなる。語頭卓立は観察されないようであるが、語頭急下降は観察される。一方C型では、第1～第3モーラのF0が高く、第3モーラでF0が低くなる。

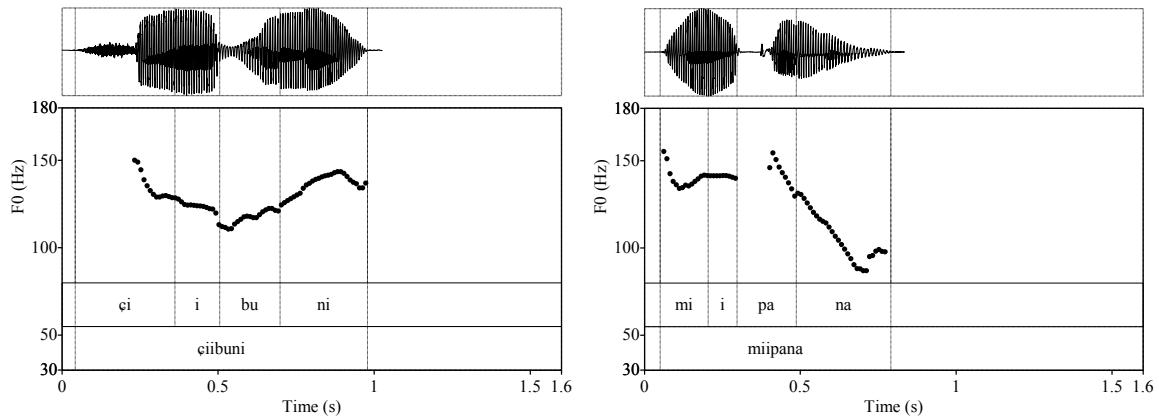


図10 4モーラ名詞単独発話. AB型 *midumu* 「女」(左)、C型 *jarabi* 「子供」(右).

3. 2. 6 アクセント型の実現形の要約

以上、3種類の条件下におけるアクセント型の実現形を名詞のモーラ数ごとに検討してきた。これまでの議論から明らかのように、与那覇方言はアクセント型の実現について複雑な様相を呈する。特に興味深いことは、アクセント型の実現形が隣接する要素の有無、種類によって著しい変化をみせる事実である。3.2.4でふれたように、この現象はアクセント型の交替とみなすことができるかもしれない。

与那覇方言におけるアクセント型の実現の様相は表5のようによく要約することができる。ここでは語頭卓立は表記しているが、語頭急下降の表記は省略している。

表5 与那覇方言のアクセント型の実現形。Xは調査語、ピリオドはモーラ境界を表す。

モーラ数	X nudu	X mee	X (単独発話)
2	AB型 ju.da nu.[du 「枝」	AB型 ju.[da me.e 「枝」	AB型 [i.]ka 「イカ」～ i.[ka
	C型 ti.[da nu.du 「太陽」～ [ti.da nu.du	C型 na.[bi me.e 「鍋」	C型 u.[s] 「臼」
3	AB型 mi.du.mu nu.[du 「女」	AB型 mi.du.[mu me.e 「女」	AB型 mu.du.[mu 「女」
	C型 ja.ra.[bi nu.du 「子供」	C型 [ja.ra.bi] me.[e 「子供」	C型 [ja.ra.]bi 「子供」
4	AB型 [ci].i.bu.ni nu.[du 「背骨」	AB型 [ci].i.[bu.ni me.e 「背骨」	AB型 ci.i.bu.[ni 「背骨」
	C型 nu.]z.[zu.u nu.du 「糸」	C型 [mi.i.pa.na] me.[e 「顔」	C型 [mi.i.pa.]na 「顔」

4 結語

宮古語与那覇方言の名詞アクセント体系を母語話者1名の発話に基づいて分析した。その結果、この方言は二型アクセント体系を持つとする平山他（1967）の記述の妥当性を確認した。また、アクセント型の所属語彙に関して、この方言は系列別語彙のA系列とB系列を合流させている（A·B/C）とする松森（2011）の記述の妥当性を確認した。一方、アクセント型の表層の実現形は平山他（1967）の記述とは必ずしも一致しないことを明らかにした。さらにこの方言には、隣接する要素の有無および種類によって、名詞のアクセント型の実現形が大きく変化するアクセント型交替とも言うべき現象が観察されることを明らかにした。この事実も先行研究には報告されていない（ただし注4参照）。

アクセント型の交替も含め、与那覇方言のアクセント型の実現規則を明らかにするためには、さらなる調査が必要である。今回の分析結果は、この方言のアクセント型の実現規則が複雑であることを示唆する。しかしながら今後の調査の結果によって、この方言のアクセント型の実現について単純な規則が提案できるようになる可能性もある。一方、与那覇方言と同じく宮古語の方言のひとつである池間方言のアクセント型の実現規則も極めて複雑であることが筆者らの最近の研究から示唆されている（五十嵐他 2012）。複雑な実現規則が宮古語のアクセント体系の特徴である可能性も今後探求する価値があるだろう。

本論文の分析結果は、母語話者1名を対象とした1時間の調査から得られた質・量ともに限定されたデータに基づいている。今度はより多くの母語話者の発話データに立脚して、より多様な文脈におけるアクセント型の実現を分析する必要がある。

参考文献

五十嵐陽介、田窪行則、林由華、ペラール・トマ、久保智之(2012)「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』(近日公刊) .

上野善道(1984)「N型アクセントの一般特性について」『現代方言学の課題 第2巻 記述的研究篇』東京、明治書院：167-209.

上野善道(1985)「村上方言の名詞のアクセント資料—1～3 モーラ語」『東京大学言語学論集』：25-60.

大西拓一郎(1989)「岩手県山田町方言のアクセント」『国語学研究』(29): 84-75.

上村孝二(1941)「甑島方言のアクセント」『音声学協会会報』65-66, 12-15.

金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究：原理と方法』塙書房.

服部四郎(1958)「奄美群島の諸方言について—沖縄、先島方言との比較」『人類科学』 XI.

服部四郎(1979)「日本祖語について 21-22」『言語』 8:11, 97-107; 8:12, 504-516.

平山輝男、大島一郎、中本正智 (1967)『琉球先島方言の総合的研究』 桜楓社.

松森晶子(1998)「琉球アクセントの歴史的形成過程—類別語彙 2 拍語の特異な合流の仕方を手がかりに—」『言語研究』 114 : 85-114.

松森晶子(2000a)「琉球の多型アクセント体系についての一考察—琉球祖語における類別語彙 3 拍語の合流の仕方—」『国語学』 51:1 : 93-108.

松森晶子(2000b)「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から」『音声研究』 4:1, 61-71.

松森晶子(2008)「沖縄本島金武方言の体言のアクセント型とその系列—「琉球調査用系列別語彙」の開発にむけて」『日本女子大学紀要・文学部』 58 : 97-122.

松森晶子(2010)「多良間島の 3 型アクセントと「系列別語彙」」上野善道 (監)『日本語研究の 12 章』東京、明治書院 : 490-503.

松森晶子(2011)「喜界島祖語における 3 型アクセント体系の所属語彙—赤連と小野津の比較から—」『日本女子大学紀要：文学部』 60 : 87-106.

Boersma, P., Weenink, D. (2011) Praat: Doing phonetics by computer [Computer program]. Version 5.2.16, from <http://www.praat.org/>.

Pellard, Thomas (2009) Ōgami — Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū. PhD dissertation. École des hautes études en sciences sociales.

Pellard, Thomas (2011) “The historical position of the Ryukyuan Languages”, ICHL20 Symposium Historical Linguistics in the Asia-Pacific Region and the Position of Japanese. (pp. 55-64). Osaka: National Museum of Ethnology.

Shimoji, Michinori (2010) “Ryukyuan languages: An introduction.” In M. Shimoji and T. Pellard (eds.) An Introduction to Ryukyuan Languages. (pp. 1-13). Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.